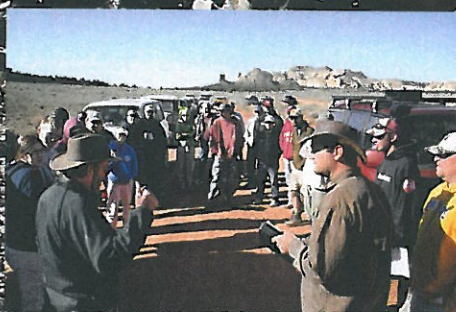


アウトドアの楽園

4×4 ADVENTURE IN THE SAN RAFAEL SWELL



スタート地点でリーダーを
囲んで行われたドライバ
ーズ・ミーティング。4月末と
はいえ朝晩は結構冷える。
背景に見えるのが前泊地の
ブロッカーマウンテン。



リーダーのカー・ワイル
ド・アムズ・ワッチ・クル
ーの会長でもある。同
クラブはトヨタの四駆オ
ーナーということが入会の必
須だが、40系や80系ラン
ドクルーザー、オーチーが
多い。

は し を走破る

4x4で世界を駆ける



サン・ラファエル・スウェル ツーリング

アメリカ・ユタ州中央部に広がる約2,400平方キロのドーム状の砂岩の台地「サン・ラファエル・スウェル」は狭く曲がりくねった峡谷や岩塔、メサと呼ばれるテーブル台地といった大自然の宝庫。東京都とほぼ同じ面積を持つ原野の中には迷路のようにオフロード・トレイルが走る。地元のランドクルーザー・クラブが開催する恒例のツーリングに参加、日本では絶対に体験できないスケール感に浸ってきた。

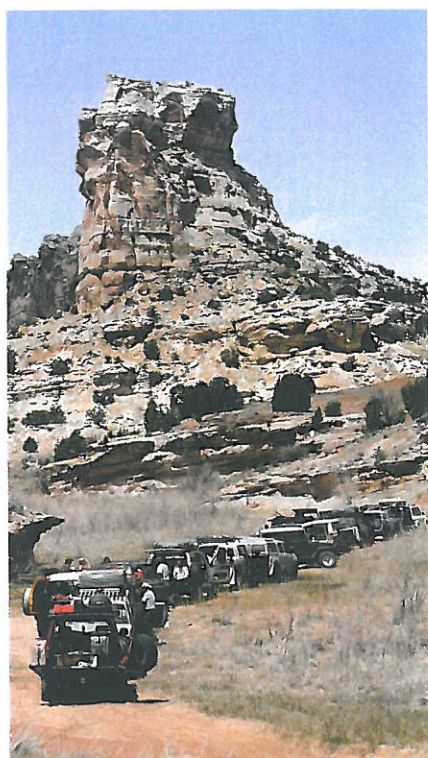
写真・文 難波 毅

デビルズ・レーストラック・トレイルの最初の大きな登りの区間に行く。一気に60メートルほど上って台地の土に出る。大きな岩の階段を何段も上って行くというコースだ。

風景に絶妙に溶け込むヨンマル



コロラド州から参加のFJ40。40系の参加は今回は2台と少なかったが、多くのランドクルーザーのイベントでは台数も少なくとも目撃おらず主役級である。純正色のグリーンが風景とよく合う。



デビルズ・レーストラック・トレイルの北端にある大きなビュート(岩塔)のふもとでランチタイムをとるコンボイ。ここはコール・ウォッシュの北支流の川原だ。



デビルズ・レーストラック・トレイルの標識。BLM(米国内務省土地管理局)が管理するトレイルで走れる車種などがきちんと決められている。もちろんトレイル以外のオフローディングは厳禁である。

コースの名は「悪魔の競走場」

朝8時、スタート地点のブロック・マウンテンと呼ばれる岩山の前でリーダーのカート・ウィリアムズを囲んでのドライバーズ・ミーティングが始まっていた。

「今日のコースのメインは、デビルズ・レーストラック(Devils Racetrack=悪魔の競走場)・トレイルだ。全長9マイル(14キロ)で標高差は1,200フィート(360メートル)ほどだが、絶壁の上を走るコースには障害がたくさんあって楽しめると思う。ただし、トレイルを外れてのオフローディングは絶対に禁止だ! さあ行こう!」



カナダのプリティッシュ・コロンビア州から参加したFJ60。ほぼストック状態のボディーは年式の割にはサビも少なく、よく使い込まれているという印象を受けた。

カートの合図で20台の四輪駆動車が参加しての「サン・ラファエル・スウェル・ツーリング」が始まった。

このツーリングはユタ州の州都ソルトレイク・シティーに本拠を構えるトヨタ4x4クラブ「ワサッチ・クルーザー」が毎年4月末に行うイベントだ。

参加者の大半はスタート地点の岩山のふもとで前泊し、キャンプ道具は残したままツーリングに参加するのだが、前夜はものすごい強風で一带は砂嵐に見舞われ、テントの中まで細かい砂に覆われるという散々な一夜を過ごすことになった。

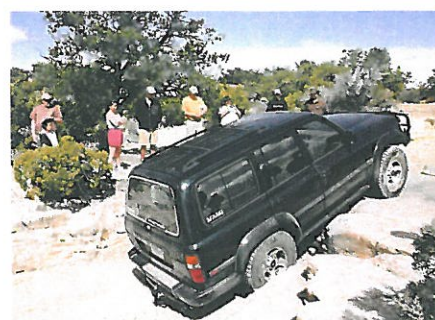
午前はたっぷり「オフローディング」

トレイルはコール・ウォッシュという小さな川の2本の支流に挟まれた細長い砂岩の台地の上を走り、階段状の岩棚やV字谷など

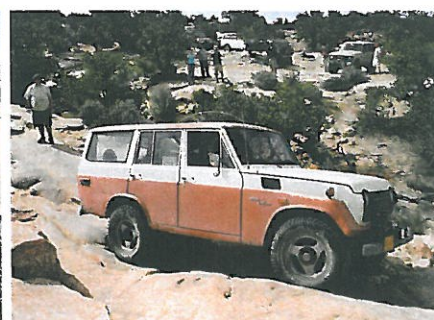
さまざまなオブスタクルが待ち受ける。大きな階段岩登りのセクションなどでは、仲間が見守る中、コースを熟知するカートがスポッターとして誘導し、1台ずつゆっくりとクリアしていく。

参加車両の多くは35インチクラスの大径タイヤを装着し、4〜5インチのリフトアップとデフロックがほぼ標準となっている。そして共通するのが冷蔵庫の装備だ。止まるたびに皆そこから取り出したコーラを片手におしゃべり…という、まさにアメリカの風景があたりで見られた。ステレオタイプな表現だが、まさに真実なのである。

トレイルは北端で一気に600フィート(180メートル)下ってコール・ウォッシュの北支流の川原に降りて終わる。大きなビュート(岩塔)のふもとでランチタイムとなった。

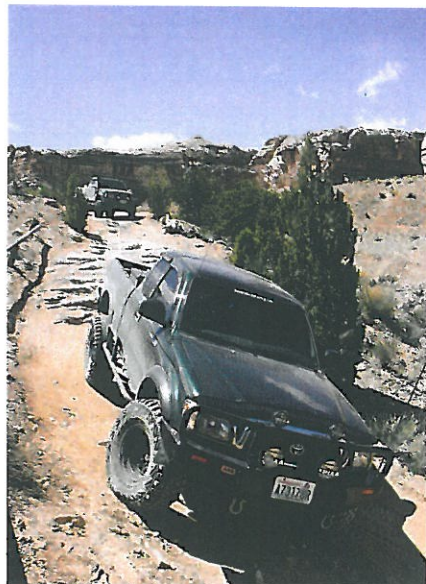


左:階段岩に挑戦するFZJ80。多くはデフロックを装着しているので大きな段差も難なく乗り越えていく。右:大径タイヤ以外はほとんどノーマルのFJ55。オレゴン州から参加したオーナーはビギナーだったが無傷でトレイルをクリア。



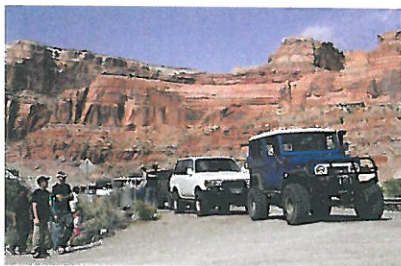


サン・ラファエル川を渡るFJ40。オーバー・フェンダーをはずしてナロー・ボディーにしてある。土埃を立てダートを走ってきた後だけに各車気持ちよさそうにしぶきを上げて渡っていった。



ワシントン州から参加したタコマ。仲間の2台のタコマと共に24時間走りつめでここまで来たという。来年も必ず参加すると大喜び。

リーダーのカーターのFJ40を先頭にコンボイを組む。カーターのランクルは2台のGPS、アマチュア無線、CB無線と“完全装備”だ。



入植時代に架けられた木製の吊橋を歩いて渡る。四駆で走り回るだけでなく名所見物的な要素も取り入れ楽しい一日を過ごすことができた。



「ザ・ウェッジ」から望む「リトル・グランド・キャニオン」。本家と比べるべくもないがサン・ラファエル川という小さな川が長い時間をかけて太古の砂岩の台地に切り込みを入れていった大自然の創作に脱帽。

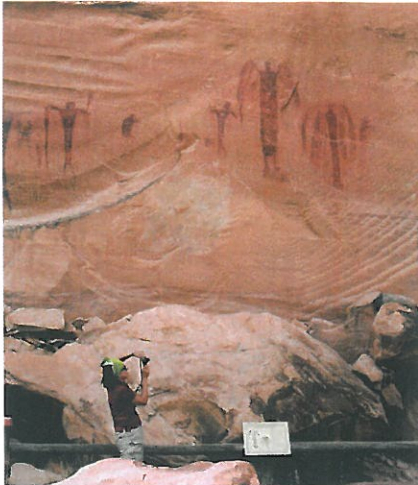
大自然を満喫する充実の一日

午後は一転、高速ダート・ドライブ

昼食後はしばらく川原を走り、グレーダーで整備されたダート・ロードへと進む。ここからはコンボイを組んでの高速ダート・ドライブ区間となる。途中でサン・ラファエル川を渡河、「ザ・ウェッジ」と呼ばれる展望台へ向かった。

この崖の上からは東方向にサン・ラファエル川が砂岩に切り込んだ「リトル・グランド・キャニオン」の光景を楽しむことができる。つい先ほどクルマで渡った小さな川が、これだけ雄大な渓谷を創り出したかと思うと、その間に流れた果てしなく長い時間と、自然の力の驚異に感嘆せざるを得ない。

そこから朝のスタート地点へ戻る途中、バックホーン・ウォッシュの大きな絶壁に残された貴重なアメリカ先住民のピクトグラフ(絵文字で記した記録)を見学し、再び出会ったサン・ラファエル川では現存する入植当時の木製の吊橋を歩るなど四駆以外のメニューも楽しめた。



約2000年前のバリア・キャニオン文化時代の先住民が描いたといわれるピクトグラフ。人間のように見える細長い姿は「雨の天使」ではともいわれているが、真の意味は未だに解読されていない。

絶妙のコース設定

広大な原野の中、一日中オフローディング三昧という設定も可能はずだが、主催者は観光の要素もしっかりと取り入れ、参加者を飽きさせることはなかった。

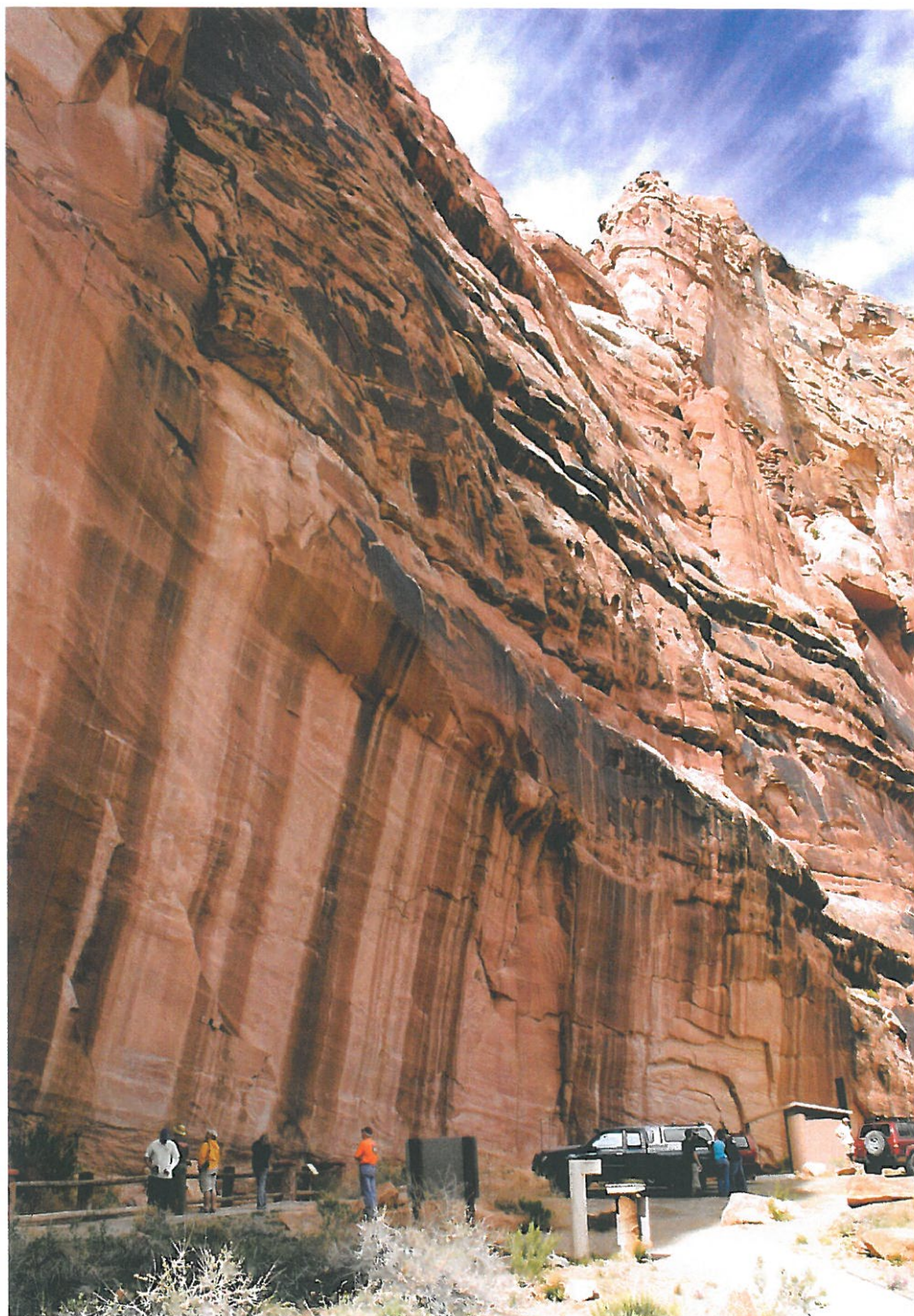
また、午前中のハードなオフローディングにしても必ずエスケープ・ルートが用意されていた。大金をかけてものすごい改造をしなくても、大径タイヤへのわずかな投資だけで初心者でも車の程度に応じたそれぞれの楽しみ方ができるような配慮が感じられた。

存亡の危機に一喜一憂

サン・ラファエル・スウェルは現在、BLM(米国内務省土地管理局)が管理する土地でウイルダネス・スタディ・エリアに指定されている。ここではキャンプ、ハイキング、ロッククライミングをはじめオフロード・バイク、四駆ドライブなどあらゆるアウトドア・アクティビティーを楽しむことができる。

しかし、オバマ大統領が一帯をナショナル・モニュメントに指定することを検討していることが明らかになった。さらにそれが国立公園当局の管理下に入ればアウトドア天国は危機存亡のときとなる。

ホワイトハウスは「これはまだ草案で何も決まったことはない」としているが、アメリカでも最大級のアウトドア天国がこのまま存続できるのか、現地では大きな関心事のひとつになっている。



バックホーン・ウォッシュの大絶壁にアメリカ先住民の描いたピクトグラフが残されている。幅50メートルにわたって数種類の絵がある。はしごをかけて描いたと推測されるがかなり高い場所に描かれている。

